和歌と戰爭

文學博士　佐々木信綱

閣下並に諸君、今や古今未曾有の世界の大戰に我が國も參加致して、大正の新たなる御代の稜威が彌々輝き渡りまする際に、明治聖德記念學會に於いて、吾が帝國軍人諸君の多く列席せられる此席に於いて、一條の御話をすると云ふことは、私の光榮と致す所である。本日の題目は和歌と戰爭とかかげておきましたが、或は武士道と和歌、愛國の精神と和歌といふやうなお話にもならうと思ふ。

元來和歌といふと、閑雅風流な大宮人の弄ひもの、然らずば貴族あるは婦女子のあるは文人のすさびとのみ思はれて居るが、それは唯、一面を見ていうたことである。古今の歷史をよみ味はふと、或は軍陣に於いて歌を謠うて士氣を鼓舞するとか、或は慷慨の志士が悲憤の情を歌に依つて述べるとか、或る時代には歌が武士の修養の具になつた時代もある。故に我が國の歷史の中から戰爭及び武士道に關した歌を聊か拔抄して其お話をしたいと思ふのである。

上代に我が國を稱へた語の中に「細戈千足國（くはしほこちたるのくに）」といふ詞がある。其詞は我が大和民族が如何に武器を愛して居たか、武を尙んだかと云ふことが分かる詞である。また「遠き國は八十綱うちかけて引よす」と云

ふ句がある。卽ち遠い國土を多くの綱を掛けて引よせるやうに我が御國に從はせると云ふ意味の句が祝詞の中にある。其等は句として傳はつて居るのであるが、歌として日本の武士の精神を最も明かに歌うた古い歌はかの「海行かば」と云ふ歌である。

海ゆかば、水づく屍、山ゆかば、草むす屍、大王の、邊にこそ死なめ、長閑には死なじ、

此歌の大意は海を行かば屍は縱し水の中に浸かるとも、山を行いて戰死したらば、屍に草が生ふとも唯、吾々は天皇の御命令のまに〳〵死するのであらう、長閑に――ゆつたりとは死ぬまい。所謂、御馬前で討死しよう、武士は疊の上で死ぬものではないと云ふやうな思想である。「邊にこそ」と、大君の御側と云ふ意味だけではなく、御命令のまに〳〵と云ふ意味にも解せられる。

此歌は文獻に見えて居るのは、奈良朝時代で、天平勝寶元年に奥州の金華山から初めて金が出たのを天皇が御悅びになつて御下しになつた詔の中に此歌が入つて居るのである。しかして我が國の元勳の家なる大伴氏及び佐伯氏の人々に對して特に御優待遊ばされたに依つて、大伴家持が喜んで詠んた長歌の中にも出てゐる、爾く文獻に見えて居るのは新しいが、此歌は詔で見ても、大伴佐伯宿禰の祖先の言ひけらくとあり、家持の歌には親の言立とある。卽ち祖先の遺訓と云ふ意味で、大伴氏の祖先から、此歌を親から子、子から孫とやうに代々傳へた歌である。大伴氏の家は天孫降臨の際に共に高天原から降つた武將の家柄で、神武天皇の東征に當つては、道臣命は總大將であつた。而して道臣命は天皇の御命令

に依つて軍の合圖に歌を謠うた人である。故に此歌は恐らくは道臣命の頃からの歌であらう。それは歌の中に「海行かば」とある。卽ち神武天皇が九州から御東征なさつたと云ふことが此歌に現はれて居るので、確かに神武天皇時代の歌であらうと思はれる。此歌は如何にも素朴なる、又武勇なる武士の精神と愛國の至情との溢れて居る歌で、吾々臣民の祖先に斯う云ふ歌を有して居ると云ふことは、吾々の誇とすべきことである。

我が帝國をお建てになつた、神武天皇は征夷の大業に關して記念すべき數首の御製がある。天皇の御製は日本紀及び古事記に見えて居るが、皇后を御娶りになる時の一二の御製を除く外は皆戰爭に關した御歌である而も其れが軍陣に於いて、或は自ら御歌ひになり或は道臣命をして御歌はせになつた今日の所謂軍歌ばかりであるのである。其一首に、

みつ〳〵し、久米の子らが、粟生には、かみう一もと、そねがもと、そねめつなぎて、擊ちてしやまむ、

天皇が長髓彥を御討ちになる際に、天皇の兄君五瀨命が曾て長髓彥の爲めに御擊たれになつたことを御憤りなつて、此度の戰には是非とも討ち滅ぼさうと云ふ意味の御製である。

みつ〳〵しと云ふのは久米といふ字の枕詞、みつとは御稜威、勢のあると云ふ意味、久米の子らは道臣命に屬する部下の兵卒、御稜威のある勢の强い兵卒等の住んで居る家の傍に粟の畑がある。粟生、芝生、

葎生みな生えて居ることを云ふ。その粟生の中に惡いものが一もと混じつて居る、惡い香のする大蒜が一もと混じつて居る。そねがもとは其根の莖といふ意味で、粟生に惡い香のする大蒜のあるのは宜しくないから之を取去らなければならぬ。其根と芽とつないで取つてしまふ如くに、此度の戰には長髓彥の一族を是非とも擊ち滅さずには置かぬぞと云ふ意の御製である。いま一首つづいてある。

みつ〳〵し、久米の子らが、垣もとに、うゑしはじかみ、ひびく、我はわすれじ、擊ちてしやまむ、

久米の子らが垣の本にうゑた波士加美(生薑の類)がある。其波士加美を食べれば口疼く、口の中がピリ〳〵するけれども、其如くに我が兄五瀨命を失うた恨は忘れない、是非とも擊ち滅さうと云ふ御製である。

この御製について注意すべきことは、此頃の戰爭は恰も今日の屯田兵の樣な形で、大和の國內をだん〳〵御討伐になつて、兵卒等はいづれも家族を引連れて行つてをつて、占領した地面に家を造り畑を作ると云ふことにして段々御攻めになつたのである。又この御製には、粟生に大蒜があるとか、或は垣の本に生薑があつて、生薑を食べると口が疼くとか、さう云ふ卑近なことを御喩へになつたのは卽ち上代の質朴な所で、尙此外にも或は戰に捷つたる酒宴に鯨を振舞ふ——鯨の肉の御歌もあり、或は海の中の石を取卷いて居る志多陀美と云ふ貝に喩へた御製もある。或は又兵站部が續かずして將卒がみな飢ゑた色があるに依つて早く救ひに來るやうにと云ふ御製もある。此等の數首はいづれも神武天皇の勇武にま

し〳〵はた士卒を愛撫し給うたる御人格が偲ばれるのである。

次に、日本武尊の東征の時にも御歌があり、彼の橘媛の御歌もあるが、これは省略して、三韓征伐の時代にうつらうと思ふ。我が上代の歴史の偉觀をなして居る神功皇后の三韓征伐に關しては、當時の將卒の間にいろ〳〵歌があつたであらうと思ふが、惜い哉、其れは傳はつて居らぬ。たゞ三韓に御出になる前に、皇后が戰捷を神樣に御禱りになりました所が、爾保都比賣命といふ神樣が神懸して、此度の御軍は必ず勝つと仰せになつたといふ詞がある。詞ではあるが、對句をなして歌の形で、新羅の國は遠くから眺むれば處女の眉を引いた樣な國でいろ〳〵寶のある國である、早く御出でになつて、陸にあがる船の波の樣に御平らげになれと云ふ意味の詞である。

また新羅の王が神功皇后に對して誓をたてた詞が、是れも歌の形を以て傳はつて居る。

今ゆ後おほきみの、御言のまにま、御馬飼として、年のはに、船並めて、船腹ほさず、さほかぢほさず、天地のむだ、とことばに、つかへまつらむ。

天皇の仰せのまに〳〵我が新羅の者共は皆御馬飼となり、毎年船を雙べて必ず貢物を奉らう。天地と共に永遠に仕へまつらう、と。又。

東ゆ、出づる日の、更に西ゆ出で、阿利那禮河の逆しまに流れ、河の石の昇りて、天つみか星になるまでに、春秋の朝參を闕き、梳鞭の、貢を廢めば、天つ神、國つ神たち、つみなひたまはむ。

東より出る太陽が西より出づる時があらうとも、鴨綠江の流が逆に流れる時があらうとも、河の石が天に昇つて星辰となる時があらうとも、永久に春秋の貢物を闕くことはない、若し闕いたならば天神地祇共に罰し給ふであらう、と。

三韓征伐が終つた後我國に内亂が起つた。忍熊王が朝廷に叛いたので、官軍の武内宿禰が兵卒を引連れて忍熊王を討たうとして菟道川を中に隔てゝ戰うた時、忍熊王の先鋒なる熊之凝（クミノゴリ）と云ふ武將が歌つた歌に、

をち方の、あらら松原、松原に、渡りゆきて、つく弓に、まり矢をたぐへ、貴人（うヒ）は、貴人どち、やいつこはも、いつこどち、いざめはな吾は、たまきはる、内の朝臣（あそ）が、腹ぬちは、いさごあれや、いざあはな吾は。

たまきはるの前で切れてゐる二段の歌である。此歌は日本紀に我が軍を進めんとして聲高に歌ひけらくとある。即ち戰爭の初めに當つて士卒を勵ました歌である。

「をち方」と云ふのは菟道川の邊りの地名で、（單に遠方ととる說もある）をち方にあらゝ松原がある。あらゝ松原は、あら〳〵繁つて居る松原で、ばら〳〵松と云ふやうな意味、松原を目標にして居るので、あるあらゝ松原に渡りゆいて、つく弓に――つく弓は槻の弓、昔は弓がみなまる木のまゝを用ゐたので、或は梓を用ゐ或は槻を用ゐてなどした。まり矢は矢の尖の方が圓くなつて居る鏑矢、音のする矢で、

戰爭の場合に敵の心を脅かすために射た矢である。貴人は貴人どち。貴き人をうまびとと云ふ。うまごりとか、うましくにとか、すべて、よいことをうまといふ。よい人はよい人同士――大將は大將同士戰ふであらう。やいつこと云ふと家之子と同じく兵卒で、卑い士卒は士卒同士。いざあはな――いざ戰はん。いざは誘ひ促す詞。たまきはるは內の枕詞、內の朝臣は武內宿禰をいふ。敵對して居る官軍の大將の武內宿禰は如何にも强い人ではあるけれども、併しあの宿禰の腹の中にはいさごあれや――砂利がありはしない。幾ら强いと云ふても砂利ばかりで腹が塡まつて居るのでないから、自分の矢が中らぬことはない、いざ戰はん吾は、と。斯う云ふ勇ましい歌である。腹の中にはいさごがあるか、否、いさごはないと云ふところに、如何にも上代の武人の思想が表はれて居り、且又敵をも讃めるといふ武士の心の表はれて居る歌である。

其內亂は直ちに定まつたが、以後朝鮮と屢、事が起つて、日本からたび〳〵援軍が行つたり征伐に行つたりして居るが、其中で、雄略天皇の御代に新羅を征伐した吉備尾代といふ大將が、五百の蝦夷を率連れまして娑婆の港に行つて、今や船に乘らうとする折柄、都の方では、天皇が崩御になつたと云ふことが分かつたと云ふことが分かつたので、部下の蝦夷等が叛いて、或ものは遁げ或ものは敵たはうとする。それで尾代が非常に怒つて、自分の負つて居た胡籙の矢全體で大勢の人を殺しまして、さうして弓を杖ついて歌ふた歌に、

道にあふや、尾代の子。天にこそ、聞えずあらめ、國には、きこえてな、

「あふ」は戲ふこと、「や」は感歎の豆爾表波で、道に戰ふところの尾代なる我の名前は、天にこそ、聞えぬかも知れぬ、――天皇の御話までは屆かぬかも知れぬけれども、國には、此國の中には聞えるであらう。自分の武勇は國々の人々はみな語り傳へるであらうといふ意、いかにも意氣天を衝く勇ましい歌である。

欽明天皇の御代に調伊企儺（ツギノイキナ）が新羅の軍に虜へられて、新羅の王我が臀肉（シリタブラ）を喰へと言うて殺させたといふ有名な話があるが、其妻なる大葉子も虜へられたのを我國の將校たちが傷んで詠んだ歌に、

から國の、城の上にたちて、大葉子は、ひれふらすも、やまとむきて、

朝鮮の城（キ）の上（砦）にたちて擒になつたるあの可哀相なる大葉子、而も夫が殺されたる大葉子はひれをふつてゐる。ひれ（領巾）は婦人の項飾である。やまとへむきて――やまとへ向きて、故郷の日本の方へ向いて。此歌はその悲壯なる史實と共に千古に傳へられた歌である。

奈良朝になつて、萬葉集には四千五百首の長短歌が含まれて居るが、その中には武人の詠んだ歌、武士道的思想を詠んだ歌が多い。中にも實際の戰を詠じた歌は人麿の長歌にある。天武天皇の皇太子なる高市皇子が薨去になつたのを傷んだ長歌――萬葉の中でも最も句數の多い百四十七句の長歌がある。上下を略して、戰爭に關した部分をあげよう。

……大御身に、太刀とりおばし、大御手に、弓とりもたし、御軍を、あともひ給ひ、とゝのふる、皷の音は、雷の、聲ときくまで、吹きなせる、小角の音も、あたみたる、虎かほゆると、諸人の、おびゆる迄に、さゝげたる、幡の靡は、冬ごもり、春野やく火の、風のむた、靡くが如く、取もたる、彈のさわぎ、み雪ふる、冬の林に、飈かも、いまき渡ると、思ふまで、きゝのかしこく、引放つ、箭の繁けく、大雪の、亂りて來れ、まつろはず、立向ひしも、露霜の、けなばけぬべく、ゆく鳥の、爭ふはしに、度會の、齋の宮ゆ、神風に、いふきまどはし、天雲を、日の目も見せず、常闇に、おほひ給ひ……

壬申の亂に際して、高市皇子は父なる天皇の御命令により自ら軍陣に御立ちになつたが、大勢の關東武士を御引連れになり、御身に太刀を帶び、御手に弓を持つて御軍をあともひ給ひ――引率遊ばされてとゝのふる皷の音は――此時分の軍にも皷を用ゐたので、兵卒を調へまする所の皷の音のはげしさは恰も雷の聲ときこえ、又吹きたてる小角の音も――法螺貝の類であるが、吹鳴らすその音も、恰も敵を見たる虎がほえるのかと諸人がおびゆる迄に激しく、又大勢の士卒がさゝげて持つて居る幡がひら〳〵と靡くさまは、恰も春の野をやく野火が風のまに〳〵靡くやうに見える。又士卒が持つて居る彈が觸れて鳴りひゞく音は、恰も雪のふる冬の林に飈が卷きわたるか知らんと思ふほどきゝのかしこく――聞くことも怖ろしい位である。引放つ矢の繁きことは、矢が縱横無盡に飛ぶさまは恰も大雪が亂れて飛來るが

如くである。其樣に高市皇子の御率ゐになつた士卒はよく働いたので、片方の大友皇子の方の士卒等は初の間は從はずに立向つて居たが、もういよ〳〵敵はぬに依つて、露霜のけなばけぬべく――消えるなら消えても構はぬと云ふやうに、死物狂ひになつて押寄せて來て恰もゆく鳥の先を爭ふ如くに兩軍相爭つて居た折柄、突然はげしい風が吹いて來た。それは伊勢の大神宮から烈しい風が吹いて來て、日の目も見せず眞暗におほつた。それで遂に壬申の亂は平定した。高市皇子はしかく軍事に於て功を御立てになつたといふ歌である此歌の中には、皷も、小角も、幡も、彈も、其當時用ゐた武器はみな歌はれて居て、之をよめば當時の軍の有樣が何うであつたと云ふことも分かるのである。人麿の歌はいかにも勢が強い。賀茂眞淵が人麿の歌を評して、恰もみ空を龍が行く如く大海原に潮が寄するが如くであると形容して居る。

次には大伴家持で、大伴家は前に述べた如く我國の元勳の家柄であつたか家持の頃は大分衰へて來た。それは藤原家の方が榮えて、大伴家は衰へかけて來たので、家持は、自分の家は斯の如き武士の家柄であるからと云うて大伴氏の人々を勵ました歌がある。卽ち武士道を皷吹した長歌短歌が多いのであるが、其中短い一首だけを此に擧げよう。

劍太刀、いよゝ研ぐべし、古へゆ、さやけく負ひて、來にし其名ぞ、

吾々大伴氏は古代よりしてさやけく負ひて、天孫降臨の時から武士の家柄として立派な名譽を負うて來

た家である。吾々の家名を汚してはいかぬ。劍太刀いよ〳〵研かねばならぬと云ふ歌である。武士道を研究する人は、武士道的歌人の代表者として家持の歌を深く研究せねばならぬのである。

尙其頃の詔の中に、關東の人の武勇の秀でたことを天皇が仰せになつて、東國の人は常に斯う云ふことを言うて居ると御引きになつた歌に、

額には、箭は立つとも、脊には、箭は立てじ、

關東の武士は敵に向つて進むことより外に知らぬから、額には縱し箭は立つとも、脊には箭は立てぬ。負けて逃げはせぬ。かやうに關東武士の强い氣性をあらはした歌である。

平安朝になつてからは、文學が貴族の專有物のやうになつたが、武人の間には歌に優れた人も出た。彼の源義家の歌の如き、其外にも武人の詠んだ歌で勅撰集に載つて居るのが大分ある。源平時代になると、平家の一門の中には歌に優れた人が尠くない。源氏では源三位頼政の如きは歌人としても優れて居つた人である。また東國の武士の中にも、戰場に立つて歌を詠ずると云ふやうな風流を忘れなかつた武士もあつた。一イ谷の戰に於いて梶原景高の詠んだ歌に、

武士の、取つたへたる、梓弓、ひきては人の、かへすものかは、

吾々武士が祖先から取傳へたる弓である、あとへひいて返すことがあらうか、如何なる時もひいて返しはせぬ、と。

梶原景季が、頼朝の奥州征伐の時に供をして、白河の關で詠んだ歌に、

秋風に、草木の露を、はらはせて、君が越ゆれば、關守もなし、

秋風に草や木の露をみな拂はせてしまつて、我が源將軍がお越えになれば、白河關も關の番人もないやうに、みな將軍の勢ひに服するであらうと云ふ、武士らしい強い歌である。頼朝も歌を詠み、頼朝の子なる實朝が殊に歌人としても優れて居つたことはいふ迄もないことであるから省略する。

此當時の鎌倉武士が歌つた今樣に斯う云ふのがある。

治まりなびく時なれや、一天四海のうちのみか、ひとの國まで日の本の、唐土が原も此ところ、

唐土が原は、今の大磯から小田原附近の平野をいふたので、彼所はもと支那や朝鮮の歸化人の多くゐた所であつたので、さる地名を得たのであるが、其地名によつて面白く歌つたので、今しも鎌倉の御世の勢ひに治まり靡く時である、一天四海のうち――此日本の國内ばかりではない、海外の國々までもやはり日本に屬する氣運が見えて居る、それは唐土が原といふ支那を名に負うた原も、卽ち此所にあるではないか。人の國までも此日本の内であるといふ、鎌倉時代の勇武な武士の氣性を表はして居る。

次に蒙古襲來――元寇の役は國史の一大事件であるが、惜い哉、此當時の武人の歌は傳はつて居らぬ。併し身を以て國難に代らんと仰せ給ひし龜山上皇の御製がある。それは龜山天皇御集といふ一卷が宮内省の圖書寮にある。自分は數年前にそを拜見して初めて御集中に次に述ぶる御製があるのを見てかつ驚

きかつ喜びましてかかる御製がとうして今まで一人として傳へる人もなく、しる人もなかつかと不思議に思ふたことでありました。その御製は、

世の爲に、身をば惜まぬ心とも、荒ぶる神は、照し覽るらむ、

明らけき神のくになる、をす國と、賴む心も、くもらぬものを、

當時如何に上皇が宸襟を惱まし給うたかと云ふことをこの御製が示して居る。此世の爲に、日本の國家の爲めには我が身を惜まぬ心である、自分の一身は何うならうとも惜まぬ心であると云ふ心は、あらぶる——猛き武の神は照覽したまふであらう、此國難が一掃すれば我が一身は何うなつても關はぬ。と云ふ御意である。明らけき神のくになる——此日本の國は明かなる神樣の御子孫の國である。其神の國なるをす國——治め給ふ國といふ意で、聞食(キコシテス)とか聞召(キコシメス)とか云ふやうに、治めると云ふことを仰せられたもので——日本國は明かな神の國である、自分は神の讓を受けた天皇である、然れば此神をなほ〳〵御賴み申して明かなる心を以て此國難を無事に濟ませたいといふ所の御製であります。

京都の宏覺禪師が蒙古降伏の願文を佛にささげました。それは漢文であるが、其願文を卷いた卷軸に一首の歌が認めてある。

末の世の、末の末まで、我くには、萬の國に、すぐれたる國、

末の世の末の末まで——未來永劫我國は萬の國に優れたる國である。なんの、蒙古などが攻めて來よ

うとも何うして動くことがあらうぞ、といふ强い心を書いたものである。其願文は數年前に發見されたので、嘗て明治三十八年に明治天皇が大學に行幸のあつたるとき天覽に供されたことであります。

また奈良の春日若宮の神官は中臣祐春が詠んだ歌に、

西の海、よせくる波も、心せよ、神の守れる、やまと島根ぞ、

西海に寄せて來るところの波も心するがよいぞ、此日本國は神の守つて居る國である、なんの蒙古ぐらゐが寄せて來ようとも動くことはないぞと云ふ歌である。

また大納言藤原爲氏(定家の孫)は龜山上皇の詔を奉じて伊勢大神宮へ勅使に參つて歸らうとする時、神風が起つて、蒙古の船が沈み果てたといふことを聞き喜んで詠んだ歌に。

勅として、祈るしるしの、神風に、よせくる波は、かつ碎けつゝ、

自分が畏くも勅を奉じて伊勢の太廟に祈つたるしるしに神風が起つて蒙古の船が——寄來た蒙古の船が片端から碎けてしまつたと云ふことを聞くのは如何にも嬉しいことである、と云ふ意。

此の如く、上は上皇より、下は奈良の神官も、京都の僧侶も、大宮人もみな一つ心に且つ祈り、心を勵ました其結果が神風ともなつたのであらうと思はれる。而してこの蒙古襲來のすんだ翌年の春、龜山上皇の御製に、

四方の海、波をさまりて、長閑なる、我が日本に、春は來にけり、

四方の海の海の波がをさまつて如何にも長閑なる我が日の本に春が來た。蒙古襲來が事なく濟んで泰平の春を迎へるといふ此時の上皇の大御心はどの樣であつたであらうと畏れながら推察せられる御製である。しかしてこの御製も御集の中に出てゐるが、自分が拜見するまでも誰も知らなかつた御製の一つであります。

南北朝の時代になると、宗良親王の御選びになつた新葉集の中に當時の南朝の忠臣が勤王の精神を歌つて千載の下尙ほ吾々をして感激せしむる歌が尠くない。後醍醐、後村上、後龜山、帝を初めとして、文貞公、北畠准后などに不朽の作が多い。こゝに新葉集から數首を拔くと、九州の菊池武時の歌に、

武士の、上矢のかぶら、一すぢに、おもふ心は、神ぞしるらむ、

軍の首途に神社に詣でて、鏑矢を一矢射たときに詠んだ歌である。この鏑矢の如く一筋に天皇を思ひ奉る心は神樣も御守護なさるであらうといふ意。選者なる宗良親王が關東に御出でになつて、足利方を御討ちになつた際、武藏野の小手指原(小金井から百草の方に行く邊)の戰に於いて皇子の軍が大分負色になつた。其時親王が馬上で御うたひになつた歌に、

君の爲、世の爲何か、をしからむ、すててかひある、命なりせば、

此歌を大聲で御歌ひになつた所が、士卒がみな共に歌ひつれて、其時の戰は官軍の勝軍になつたと云ふことである。君の爲世の爲に何の惜いことがあらうぞ、吾々の命が棄てゝ甲斐ある命ならば之を棄て

ることを惜むものがあらうかと云ふ、如何にも將卒の胸の躍る歌である。

內大臣藤原隆俊は、吉野の朝廷に仕へて居つて、どうかして今一度天皇を元の京都へ御還し申上げたいと云ふ心をよんだ歌に、

君が爲、わがとり來つる、梓弓、もとの都に、かへさざらめや、

天皇の御爲に自分が取つて來た弓、自分は文官ではあるけれども尙ほ武官と同じ樣に朝夕に弓を取りならして居る。弓はもとすえと云ふから、もとと云ふ字の枕詞にして、今こそ吉野の山奥に御ゐでになるけれども、再びもとの都へ御還し申さずに置かうかと云ふ歌である。

同じ頃源致忠の歌に、

命をば、かろきになして、武士の道より重き、道あらめやは、

此命をば輕きになして、武士の道より重き道はないと思ふの意で、武士といふことを詠んだ歌の最も古いものである。武士道の精神は神武天皇の御代から己にあらはれて居るが、かくのごとく歌の中によみいれたものゝ最初のものである。

南北朝の亂の濟んだ頃から歌が段々武士の間に普及して來た。足利時代になつて武人として今川大雙紙を書いたと云れる今川了俊の如きは歌人としても優れた人であり、又下總の東庄を領して居た東常緣の如きも、武將であり且つ歌人として優れて居つた。宗祇法師で、所謂古今傳授を始めた人であるが、

常に下總に居て、親の領して居たる美濃の郡上の城へは行くことが出來なかつた。然るに常緣の不在を知りつゝ美濃の稻葉の齋藤妙椿が郡上の城を攻めて取つてしまつた。それを常緣が非常に嘆いて、祖先から傳へられて居る城を自分の時になつて失ふたのは甚だ嘆かはしいと云うて歌を詠んだ。其歌を或人が妙椿に見せたところが、いかにも是は氣の毒であつた、留守の處を攻めて、而も情ある武士の城を取つたのは甚だ遺憾であつたと云つて、卽ち歌の德に感じて郡上の城を還したといふ話も傳はつて居る。

其他此當時の武士が辭世の歌を詠むといふことも段々起つて來て、當時の軍記類を見ると勇ましい辭世が澤山遺つて居る。足利の末になつて文敎が地に墜ちました時代には、諸國の武士の敎育の一科として修養の具として和歌が大に奬勵された。武田信玄の如き、毛利元就の如き、歌集を遺して百首の歌などを遺して居る。中にも信玄は信玄家法といふ箇條書の中に、歌道をたしなむべき事と云ふ一箇條があり、北條早雲の早雲二十一箇條にも、歌の心なき人は無手に卑しきものなり勵むべしとやうに奬勵して居る、又朝倉敏景の家法の如きも、其奥に了俊の歌が書き添へてある。

此當時の武人の中で最も歌に優れて居るのは太田道灌で、幕京集といふ歌集がある。また道灌は底ひなき淵やはさわぐの歌や、鳴く音に汐の滿干をぞ知ると云千鳥の歌などを軍に應用したといふ逸話も傳はつて居る。

文祿元年に、豐太閤が海內を統一して、遠征の軍を企て、關白職を秀次に讓つた時細川幽齋の詠んだ

歌に、

日の本の、光をみせて、はるかなる、唐土までも、春やたつらむ、

我が日の本の御稜威をみせて唐土までも春が立つであらう、と。如何にも支那四百餘州を呑んだ意氣の見える歌である。

蒲生氏卿は仙臺に居つたが、肥前の名護屋陣に加はらうと上洛をした。其際に那須野原を通つて詠んだ歌に、

世の中に、我は何をか、なすの原、なす業もなく、年や經ぬべき、

世の中に我は是れまで何をしたか、なすの原のなすと云ふのを掛けて、なす業もなく徒らに年を經てよからうかと云ふ感慨を漏らした歌である。

同じく朝鮮陣の前に薩摩の新納武藏守忠元が、島津義久の出征に際して、自分はもう老年であるから此度の御供はよう出來ないと云うて、義久の軍を海邊まで送つたとき詠んだ歌に、

あぢきなや、唐土までも、おくれじと、思ひしことは、昔なりけり、

御主人の爲には唐土までも何處までも後れまいと思つた事は昔であつて、此樣に年を取つたことは如何にも情ないと云ふ意である。

新納武藏は薩摩隼人ではあるが、歌の趣味の深かつた人で、嘗て合戰の時に野宿をした所今で云へば

塹濠で――土を掘つて其陰に隠れて居たに、さうして暗い晩のことであるが、火繩の明りで何か本を讀んで居る。不思議であると思つて部下の者が行つて見ると、それは小さく書いた古今集であつた。この火繩の明りで古今集を讀んで居つたと云ふ逸話は、彼のアレキサンダー大帝がホーマーの詩集を軍中にも携へて居つたといふ話と古今東西相似通つた話である。さう云ふ風の人であるに依つて、この忠元の詠んだ歌は澤山ある。

敵ぞとて、何かは人の、にくからむ、同じみくにの、同じ身なれば、

敵であるからといふて、なんの人が憎いことがあらうぞ。同じ日本の國の臣民であるによつて、何の之を憎むことがあらうぞ。敵味方に分かれて戰こそすれ、憎むと云ふことはない。斯う云ふ考を推擴げたのが彼の高野山に建つて居まする碑――朝鮮役の時敵味方の供養のために建てた碑である。この碑の考も此考も同じであると思ふ。

尙ほ此新納武藏は軍陣に於ていろ〳〵軍歌風の歌を謠はせた。有名な、

肥後の加藤が來るならば、煙硝肴に玉會釋、玉は何玉、鉛玉、それでも聽かずに來るならば、首に刀を引出物。

と云ふ歌である。是れは十首つゞいてゐる歌で、戰爭の心懸などを謠はしたものである。

いづれも肥後の加藤を目當にして戰つて居たに因つて、多く加藤の事が詠んである。

朝鮮陣に方つては、奥州の伊達政宗の如きは、陣中で寫した、謠曲本が傳はつて居て、昨年の大學の史料展覽會に出品されました。文祿二年の八月朝鮮に居た政宗は家來の原田左馬介が對馬の國で病死致したと云ふことを聞いて、非常に嘆いて南無阿彌陀佛の名號を句の頭においてた六首の歌を詠じた。其中の一首に、

陀れとても、つひにはゆかん、道なれと、先だつ人の、身ぞあはれなる、

猛く雄々しい獨眼龍も臣下の死に對して斯う云ふ優しい歌をよんでゐる。尙それより床しいのは、文祿二年の春朝鮮在陣中の政宗のもとに母なる最上氏から手紙が來た。それを政宗が披いて見ると中からポロ〳〵と落ちたのは梅の花であつた。それに歌が添へてあつた。

秋風の、立つからふねに、帆を上げて、君かへりこん、日の本のそら、

時は春であるが今年の秋風の立つ頃にはどうか首尾好く唐船に帆を上げて日の本の空に歸つて來るやうにといふ母の情の籠つた歌である。尙朝鮮陣が濟んでから歌つた俗謠に

伊勢のよう田のかみ祭、むくりこくりを平らげて、かみよきみよの國々まで、千里の外までゆたかなり、老若男女おしなべて、參り下向のめでたさや、

伊勢のよう田は山田のこと、むくりこくりのむくりは蒙古、こくりは高麗である。此時分には外國の人を指してむくりこくりと云つた。恰も毛唐人と言ふ類である。慶長の頃に來朝した、コックスが伏見

の邊を通ると道傍の子供等がむくりこくりと言つたと云ふことがコックスの紀行に見えて居るといふことである。さう云ふ風に、むくりこくりと云ふのは外國人を惡く云つた語である。むくりこくりをお平げになつて、かみよきみよの國々まで千里の外までゆたかなり老若男女おしなべて――此度の朝鮮征伐が無事に濟んだ御禮參りに大神宮樣へ參詣して、この下向のめでたさやと云ふので、如何にも太平の氣象を現はされた歌である。

徳川時代になつて、徳川家康は古今集の傳授を受けたり、又歌に付いて面白い考を有つて居た。元和の堰武以來は、時々小さい事變はあつたが、戰爭の歌と云ふものは少くなつた。唯島原合戰の際に板倉重昌が詠んだ歌に。

新玉の、年に先だち、咲く花は、世に名をのこす、魁と知れ、

戰ではないが、元祿の赤穗の四十七義士の歌には胸にせまるあはれなものが少くない。

幕末の頃になつて、勤王の志士の詠んだ歌が澤山ある。殆ど名の知られて居る人にはどの人にも歌のない人はないと云ふ位である。其等の歌は何れも勤王の思想、憂國の誠が迸つた歌で、平野國臣の如き、佐久間象山、櫻東雄、伴林光平の如きは歌人としても立派な値打のある人である。茲には櫻東雄の歌を擧げよう、

まつろはぬ、やつこ、こと〳〵、束の間に、燒き亡ぼさん、天の火もがも、

天皇の御命令に從はぬ奴原を悉く束の間に、瞬間に燒き亡ぼすやうな天の火が降れば宜いと云ふ歌である。此東雄は常陸の霞ヶ浦の湖畔の僧侶であつた、藤田東湖などの話を聞いて、還俗をして名前を櫻靭負東雄と云つた。卽ち梅の花のその雪と消えるやうな東の男の意で付けたのである。此人の歌の中には、日本の國からを現はして居る佳い歌がある、

朝日かげ、豐さかのぼる、日の本の、やまとのくにの、春のあけぼの、

彼の敷島の大和心の歌と相並んで優れた歌で、朗々と歌ふといかにも調子の高い歌である。

幕末の女丈夫に野村望東尼（筑前福岡人）があつた、高杉晉作や平野國臣を助けかくまひ、又月照が薩摩に下るのを自分の別莊に宿めたりして、さう云ふことから、罪を得て玄海灘の姫島と云ふに島流になつた有名な女丈夫である。此望東尼は正五位を授けられて勤王家としては名高い人であるが、自分が東尼の家集を詠味はつて女歌人としても德川時代第一位であることを推奬した人である。玆にその歌を一首擧げて置かう、

ものゝふの、やまと心を、より合せ、末一すぢの、大なはにせよ、

武士の心が彼方此方になつて居て、仲間內にも色々揉めがあつたから、此やうに互ひに揉めてはいかぬ、武士の大和心をより合せて末一筋の大繩にしなければならぬと云ふ、實に益良男ぶりの歌であります。當時の勤王家の歌は實に鮮かな特色があつて、恰も火花を散らしたやうな立派な作が傳はつて居る。

明治になつての戰爭は、或は十年の役二十七八年、三十七八年の役などに、それ〴〵佳い歌があつたが、近頃のことであるから省略して、最後に一言申上げたいのは明治天皇の御製であります。明治天皇の大なる御人格から御詠みになつた御製は何れも吾々國民の鑑とすべき歌が多いのである。天皇は御幼少の時から御歌を御詠みになりましたが、殊に御優れになつた立派な御製が世の中に出るやうになつたのは二十七八年三十七八年の二大戰役の御製である。我國を初めて御開きになつた神武天皇が優れた歌聖で在せられた如く、第二の神武天皇と申し奉るべき明治天皇が亦優れた歌聖で在らせられたと云ふことは、吾々文學の道に携はる者の非常に喜びとする所であります。此事をもちまして今日の話を終らうと思ふのであります。（完）

釋了然

七十一年、夜夢紛然

一旦覺來、有何事、水

在澄潭月在天